

登場人物

私

ぬいぐるみ

明転。

台詞の書かれた紙が散らばっている部屋に、「私」が立っている。

自分の身体が動くことを喜ぶ。「わあ」

声が出ることを喜ぶ。「わあー」

関節が曲がることには、まだ気がついていない。

手足を曲げずに、辺りを動いてみる。

座っているぬいぐるみに気がつき、

ねえ、ここどこだっけ？ ねえねえ

散らばった紙を拾い上げると、一行分だけ台詞が書いてある。

以下、【】内の台詞はすべて紙に書いてある。

【引っ張らないでよ。耳】

ああ。ごめん。

【がさつなんだから】

ごめん。ねえ、ここどこだっけ？

【バカ】

え。

【よく見て見なさい】

え。(ぬいぐるみを持ち上げ、下からのぞく) ……ん？ (紙が落ちてきて)

【ちよっと！ 最低！】

あ、ごめん。あれ？

「私」が、大きな紙を破ると、部屋の説明が書いてある。

【家具は引っ越してからまだ一度も動かしていない。ソファとローテーブル。役に立たないスタンドライト。冷蔵庫に電子レンジ。テレビとラジカセ。炊飯器はめったに使わない

けど、一応おいている。申し訳程度のちいさなゴミ箱。洗濯もの干し。ごちゃごちゃの白い棚。】

ああー！ あ、そういうことか。

【バカね】

だって、ほら、いつもと、目線が違うから。ね。

【そうだけど、気づくでしょ、それくらい】

気づかないものもあるんだよ。

【ぼんやりしてるんだから】

うん。(歩きながら) ああ、やりにくいなあ。

【そんなことないでしょ】

そんなことあるよ。だいたい、なんでこんなに長い手足なの？ 邪魔じゃないの？ 長すぎて届かなかったよ。逆に。逆に。(紙を掴もうと手を伸ばすが、近すぎて二歩、足を引く) ほら。ね？

【曲げればいいのよ。まんなかで】

え？

【まんなかで曲げればいいの】

え？ (腕を曲げてみて) うわあああ！ ええええ！

【曲がるのよ】

まじか！

【まじよ】

まじか！

【足も曲がるのよ。まんなかで】

(足を曲げてみて) うおおおおお！ すっげえええ！

【曲がるのよ】

まじか！

【まじよ】

まじか！ でもきつつい！

【上手に曲げるといい感じになるの】

え？ え？ あ、え？ こう？ おおー。

【そしたら座れるのよ】

すわ、え？ 座るの？ え？ (座ってみて) わあああ……。すごいな。すごいな。

ああ、やっぱこれくらいが落ち着くなあ。なんで大きくなっちゃったんだろ。小さい方が楽でいいのね。テレビでやってたんだけどさ、二酸化炭素が多すぎるんでしょ？ それさ、皆が小さくなればいいんじゃないかな。そしたら二酸化炭素も少なくなるし、あの、あの……。 (他の有害物質を考えるが思いつかず) 色々悪いもの出るのも、少なくなるからいいんじゃない？

返事はない。

……あれ？（紙を読まなければいけないことに気がつき）ああ。（立ち上がりうとするが）あ……立てない。

「私」、何とか立ち上がる。

どっこいしょ。これ、真似ね。よくやるでしょ。あーどっこいしょ。

紙を選び、拾い上げる。

【落ち着いてどうすんの】

なんで大きくなっちゃったんだろ。小さい方が楽でいいのにね。

【もっと大きいもの、いっぱいあるわよ】

テレビでやってたんだけどさ、二酸化炭素が多すぎるんでしょ？

【そうだっけ】

それさ、皆が小さくなればいいんじゃないかな。そしたら二酸化炭素も少なくなるし、あの……色々悪いモノでるのも、少なくなるからいいんじゃない？

【一理あるかもね】

そう？

【どっこいしょなんて言わないからね】

そう？ あー、自分より小さいやつ見るなんて久しぶりだなあ。なんか変な感じ。大トトロになった気分

【メルヘン】

最近出会った自分より小さいやつなんて、この前通りすがったゴキブリくらいなものだよ。あ、これ言っちゃいけないんだ。言っちゃった。

【ころせ】

わあ。

でもさ、でもさ、ゴキブリだって、生きることに必死だけなんだよ。なんていうか、生き方が相容れなかったんだよね。きつと。何か前に、やってたよね。ゴキブリの歌。あれ、けっこういい歌だったよね。ゴキブリは、英語で言うとかックローチで、すごくかっこいい名前になって、流し台で自分のプロポーションにみとれるっていう。「おいら、コックローチ。脂ぎって」、イエス！ って歌ってた。あの時のゴキブリ君はかっこよく見えたもんね。音楽の力ってやつだなあ。よくさ、テレビで、音楽の力って言ってるよね。つまりさ、そういうことなんだろうね。かっこよく聞こえるっていう。

【ばっかじゃないの】
そう？

【かっこよくいったってゴキブリはゴキブリでしょ。敵なのよ。ゴキブリは敵なの。ラスボスなの】

そうなの？ そうなの？ でも歌ってたでしょ。

【歌ったらそう思ってるってわけじゃないのよ】
そうなんだ。

あんなに気持ちよく歌ってたのにね。 君が。

「私」、電気をつける。ぬいぐるみと中身が入れ替わる。

聞いて聞いて聞いて！ ヤバいの！ ヤバいの！ ヤッバイの！ ゴキブリってコックローチって言うらしいの。ヤバくない？ コックローチってヤバくない！？ 若干おしゃれじゃない？ 笑ったわ。今日みんなで笑ったわ。見る目かわる。早々殺せないわ。っていったらうさちゃんが「まあ殺すけどな」だって。確かにー。確かに殺すわ。普通にキモいわ。それでね、アタシ、木琴係じゃん？ 今日も練習あったんだけど、アタシ木琴叩いてたら、うさちゃんが、うさちゃんアコーディオンなんだけど、うさちゃんがちらちらこっち見てくんの。いや、指揮見なよってアタシは目で訴えるんだけど、もう聞く気なし。見る気ない。こっち見て来るくせに気づこうともしないっていう。それが気になるからアタシもそっち見ちゃって、だからボロボロだったよ。今日うまくいかなかったの、絶対アタシらのせいだよ。

あー、それもあと一週間だなあ。終わったら、うさちゃんとハチとトラオと打ち上げしようって言うてるんだよね。トラオが店の予約してるらしい。母さんには黙っててよ。絶対うるさいし。君もくればいいのに。何着ていこうかな。最近制服しか着てないもんなあ。

「私」、衣装ダンスをひっくり返す。台詞の書かれた紙が散らばる。

【ハダカでいいじゃん】

何言ってるの？ バカ！

【おいら、いつもハダカだもん】

変態！ (母さんの声がして) あ、違う、練習！ えー、変身！ コックローチ！ 変身！ あ、明日お弁当いらさないから！ みんなでおにぎり食べるんだって。

…… (足音が遠くなったのを確認して) ばか。アタシが変態だと思われるとこだったじゃん。

【変人にはなっちゃったね】

もう……妻えた。寝よ。明日に備えて寝よ。明日も早起きなんだ。朝練するんだって。君

そうなんだ。

「私」、電氣をつける。ぬいぐるみと中身が入れ替わる。

そうなの。

楽しいことがあると、そのときは「楽しい！」ってなるでしょ？ 実際楽しいんだけど、終わった後に、ふ、っと来るの。あのむなししい感じが。寂しくって、つまらなくって、悲しい感じがね、来るの。アレが嫌で仕方ない。例えば、映画館から外に出たときの騒音とか、宴会の後の帰り道とか、頑張って仕事して、達成感に浸った直後とか、物語を読み終えて本を閉じた瞬間。舞台が終わって片づけてる時の、あの、床の感じ。

別にその時でもうおしまい、二度と来ないってわけじゃないの。解っているんだけど、でもね、また次があると思うじゃない？ てことは、またあの「虚しい感じ」もやってくるってことなの。それで、また楽しい！ ってことがあって、そうするとあの感じがきて、また……

そうやって繰り返さないといけないってこと。そう考えると、なんだかもう悲しくなってきた、繰り返していること自体が空しくなってきた、だから、そうならないように、先に考えておく。例えばね、旅行に行くってなったら、楽しみになるけど、そのあとは「あの感じ」が来るんだなって、構えておく。何かに夢中になりそうになったら、いつか終わりが来て、また冷静になることを考えておく。誰かを好きになったら、いつかこの人を好きでなくなる日が来るかもしれないってこと。赤ちゃんが生まれる！ って聞いたら、凄く幸せな気持ちになるんだけど、その子もいつか死んじゃうんだってこと。終わりがあるんだってことを、忘れないようにしておくの。そうしたら、少し気持ちが楽になるから。

【夢がないね】
うるさいな。

【それ、楽しいの？】
楽しくはないけど、楽になるよ。楽しい！ って思えるし。そりゃあ、なんにも考えないでいる方が、もっと楽しいんだろうけどね。

【終わりが来なければって思うの？】
それはそれで嫌。

【わがままでね】
わがままなの。

【嫌なことはどうするの？】
同じように考える。嫌なことにもいつか終わりが来るんだろうなって。これはいいことだよね。君は？ 毎日楽しい？

【楽しいと思うよ。そこは気持ちの持ちようって奴だから】
そう。それはそれでいいかも。ねえ、どうでもいいことなんだけど、「気持ちの持ちよう」

って巧い言い方よね。気を持つって、確かについて思う。気をしっかり持つって、大事なことよね。気をしっかり持たなきゃ、上手く立ってられないもの。ね、「気」って、現実と自分をつなげているような感じがするなあ。気を巧く持つてると、上手く生きていけると思えるよ。そう思うと、アタシの考え方も、気持ちの持ちようってことなのね。

【そうかもね】

ああ、今日は少し喋り過ぎた。もう寝るわ。明日も予定あるし。現実見なきゃね。君は？明日の予定は？

【ないよ。でもね、例えば】

「私」、電気を消す。ぬいぐるみと中身が入れ替わる。

例えばね、おいらは明日予定がたくさんあるんだ。まず早起きして、運動をする。朝ご飯ははちみつパン。近所にトラオくんがやってるパン屋さんがあって、そこでいつも丸いパンを買ってて、それを半分に切ってちよつと焼くんだ。内側はモフモフんだけど、それが表面だけカリッとなったら、そこにはちみつを塗って食べるんだよ。温かい紅茶と一緒に。おいらは紅茶の淹れ方はよく分かっていないんだけど、なかなかおいしく出来てると思ってる。

【ふうん。それで？】

ご飯を食べたら散歩に行く。行きしなに、うさぎさんに会って、「どこにいくの？」と聞いてくるので、おいらは「散歩がてらはちみつを買いに」って答える。丁度、朝、少なくともってことに気がついていたらね。

うさぎさんに手を振って別れて、はちみつ屋に着くと、ハチさんがカウンターに座っていて、「やあ、今日は何にする？」と聞いてくる。おいらは「今日はいつもの」と答える。いつものっていうのは、林檎のはちみつのことよ、おいらはそれが大好きなんだ。林檎とはちみつじゃないよ。テレビでよく言ってるでしょ。カレーに入れるとおいしいとか。でも、おいらはカレーはいらないし、林檎とはちみつをとろり溶かしたいわけじゃない。林檎のはちみつだよ。ハチさんはいつもの通りに、小さな瓶にはちみつを入れてくれる。

家に帰る途中に、トラオくんに出会って、「おいしそうなはちみつだね」というので、おいらはお茶に誘ってみる。トラオくんは「御呼ばれしようか」だって。それから二人で帰って、はちみつ入りの紅茶とトラオくんが焼いたキャラメルパンを食べながらのんびりするんだ。

【優雅な一日ね】

うん。でも全部ウソだけど。

【なんなのよ】

アハハハ！ ホントなわけじゃないでしょ？ だって、おいら、動かないもの。何も食べないし。仮においらが動いたり、食べたり、そういう、「いきもの」みたいなことができたな

ら、うさぎさんが居たら、おいら、食べちゃうよ。だって、「いきもの」なんだから。お腹も空くし、だからって、いつもパンとはちみつと紅茶だけじゃ、飽きちゃうよ。野菜も食べたいし、肉も食べたいよ。それに、うさぎさんと仲良くも出来ないよ。

【それはそうかもしれないけど】

テレビでやってたよ。違う種類のいきものとは、なかなかうまくいこと分かり合えないんですよ？ ゴキ（言っただけじゃない単語だと思っだし）……ゴ……と分かり合えるなんて思えないし。おいらは実際どうなのか知らないけど、わかる気はするよ。世界中のいきものと分かり合ったら、そのうちみんな死んじゃうもんね。

【君のいうことは一理あるけど】
あるけど？

【じゃあ、アタシと君はどうなるの？】

簡単だよ。だっておいらは作り物なんだから。「いきもの」じゃないんだよ。まさか、作り物と分かり合おうなんて考えないでしょ？ だって、そういうこと考えないようにするために、都合のいいように作られているんだから。

【それもそうね】
それもそうだよ。

【困るのは、分かり合えるはずなのに、分かり合えないってことなのよね】
どういうこと？君のいうこと、時々わけわかんないよ。

【違うものと分かり合わないだけじゃなくて、同じものとも分かり合えない時があるってこと】
まじか。

【まじよ】
まじか。なんで？

【なんでなのかしらね】
テレビでいったよ。戦争っていうやつでしょ？

それについて話さ、おいらちよっと考えたんだけど、みんな違う種類のいきものだって思えばいいんじゃないかな。つまりさ、おいらは思うんだけど、戦争ってやつは、分かり合おうとするけど分かり合えないものが問題なんだよね。だから、悲しい気持ちになるんじゃないかな。分かり合えないものって思ったら、少なくとも悲しい気持ちにはならないんじゃないかな。違う種類のいきものと分かり合えないからって、誰も怒ったりしないもんね。そりゃあさ、分かり合えるのが一番だけさ、けっこう大変なことだと思っし。

そうしたら、例えば、どこかの国がどこかの国と戦っても、他の国が怒ったりはしないよ。だって、ゴキブリを殺したとしても、誰も怒ったりしないでしょ？ あ、言っちゃいけないだった。言っちゃった。

【それはそうかもしれないけど、それってすごく嫌な考えだね】
そうなの？

【アタシは好きじゃないし、あんまり受け入れてもらえないと思うわ。そもそも、問題はそこじゃないと思う。分かり合うとかどうとかじゃないと思う】

そうなんだ。政治的戦略ってやつなのか。

【色々あるの。そんなに簡単なことじゃないのよ】
そうなんだ。

【それに、なにも戦争なんて大きな話じゃなくても、起こってることなんだから。すぐそばにいる人にだって、あることなんだから】
ふうん君は？そういうことあるの？

「私」、電気をつける。ぬいぐるみと中身が入れ替わる。

あるわよ。

ちよつと。またテレビばかり見てるの？ いいご身分ね、動かなくていいんだから。そうやってほんとかどうか分からない情報ばかりあつめて、知ったかぶりになってんでしょ。バカみたい。

「私」、テレビをひっくり返す。紙が散らばる。いくつか拾い上げ、

これはガセ。これも嘘。これはただのウワサ。これは机上の空論。これは誰かの未来予想図。この辺は全部「諸説あり」がつく。ほら。ホントの話なんてどこにもないじゃない。

【別にホントのことを知りたいわけじゃないんだもん】
あつそ。ああそうよね。君には嘘か本当かどうかなんて関係ないか。どうせこの部屋から出ることもないし。どっちだって、何にも出来やしないんだもんね。

【それは君だって同じでしょ？】
一緒にしないでよ。最低。君なんかと一緒にしないでよ。

ちよつと、こっちちゃんと見なさいよ。言いたいこと言ってそっぽ向くなんて卑怯な真似しないでよ。何よ。何よ。ただのぬいぐるみの癖に偉そうだし、変に口きくし、言うこと聞かないし、ホント、最低。君と話してるの嫌になる……。

……ごめん。

【おいらだって傷つくんだから】
ごめん。

なんか、色々あつて……苛々してた。人間って大変ね。順番に物事が進むわけじゃあないんだもの。

あのね、同級生に久しぶりに会ったんだ。高校の同窓会。十年ぶりくらい？ 変わったよ。うな変わらないよなさ、そんな感じ。懐かしいような新鮮なよな、ね。丁度それくらいの時節だと思わない？ 十年って。すっかり変わったわけではないけど、共有していな

い経験がたくさんあって、だから変わったようにも見えるんだよね。

あのね、高校で仲良かった子がいてね。卒業した後は全然連絡取らなかったんだけど、だからホント久しぶりにだったなあ。

結婚して、で離婚したんだって。そんなこともあるんだねっていったら、「うん、上手く分
かり合えなくて」って言ってたよ。何か、赤ちゃんできてたんだって。あのね、赤ちゃん
ができてただけど……うまく分かり合えなかったんだって。喧嘩したわけじゃないの。
旦那さんとの子、望んで妊娠したんだって。ふたりで子供が欲しいねって言って。でも、
ふと思ってしまった。「この子のこと、生まれてくる自分の子どものこと、本当に愛せるの
かしら」って。そう思ってしまったって、それで、おろしてしまったんだって。旦那さんにも
相談せずに、たったそれだけのことで。簡単に、おろしてしまったんだって。

「馬鹿よね」ってわらってた。「なら子供が欲しいなんて思わなければいいのにね」って。
旦那さんには相当怒られて、結局別れてしまって、でも説明しようがなかったんだって。
なんだか、そんな、「愛せるか分からない」なんて、そんな状態のまま産んでしまう自分が、
どうしても許せなかったんだって。

【それは愛情？】
わからない。

【それはエゴ？】
わからない。それは、その子にしかわからないよ。ホントのことは、自分には分からない
だよ。誰も教えられないし。思うことは、たくさんあるけどさ……。

【ふうん。どうして分からないの？】
どうしてだろ。違うものだからじゃない？ 量産された、同じものじゃなくて、作り方が
違うっていうか。

【しつれいな】
ごめん。

【言いたい事は解るよ。つまり君は、その子とは違う生き物だってことでしょ？ 少し似
ているだけで、全く違う生き物で、だから考えていることや感じる事が全く同じなわけ
ではないんだよね】

うん。だから、人間にはルールが必要なんだ。

【だから君は、その子が経験したことについて同じ感想を持つことは出来なくて、ホント
のことはその子にしかわからないから、正しいことは何も言えないってことだよね】

うん……だって、アタシに言っていないことだってるだろうし、嘘ついていることだってある
かもしれないし。「事実」だって、誰かの口からきけば「ねつ造」と一緒でしょ。

【それで、おいらがひどく言われたことと、何が関係してくるのかなあ】
ごめんって……しつこいね。

【しつこいよ。おいらだって傷つくんだから】
分かった分かった。アタシはね、だから……だから、そういう経験もないし、子供を授か

るとか、産もうとか、愛するとか、そういうこと考えたこともなくって、自分なりに満足してる日々は送っているけど、何もかも充実しているとは言い切れなくて……その、同じ生き物だと思っていたものが、本当は違うものだったっていうことに気づいてしまったのね。

【それで？】
だからね、ふっと世界がつまらないような気がしてきてね、そう思ってしまう自分がとてもつまらないような気がしてきて、気持ちの持ちようがね、上手く持てない感じ。

それで、なんだかイライラしちゃったのね。当たり前のことがつまらないと思っちゃった自分に、イライラしちゃったのね。

【つまり、おいらは全く関係ないってことじゃないか！】

関係なくはないよ。君は、当たり前のことを、当たり前と思わなくてもいいんでしょ？ ちよっとひがんじやったの。

【君だってそうすればいいじゃないか】

うん。ねえ……

もう戻らない？ アタシ、人間するの、疲れちゃったんだけど。やっぱり君の方が向いてると思うよ。もう結構経ったよ。もう戻りたいよ。そっちに。

だってさ、むかつくおっさんとかさ、うるさいおばさんとか、偉そうな馬鹿とか、生意気なガキとか、建前とか、表裏とか、アイデンティティとか、大事件とか、大災害とか、世間の荒波とか、将来とか、思い出とか、なんか、疲れちゃったよ。

そっちに戻りたいよ。ねえ。昨日保護した母子家庭の女の子は、朝起きたらお母さんが死んでたんだって。先月出会った男の子は、先週自殺したんだって。あのおばあちゃんの家は、一晩でおじいちゃんと一緒に焼けちゃったんだって。一昨日轢かれたタヌキの死体は、今日になっても転がったままだったよ。この前読貫った本は、すぐ読み終えちゃった。

今日もそれなりに頑張って生きたよ。悲しいことも楽しいこともあったよ。当たり前だよ。全部、ありふれたことなんだけど……

……もう寝るね。君は？明日の予定は？

【ないよ】
ばか。

「私」、電気を消す。ぬいぐるみと中身が入れ替わる。

ひどいな。しかたないでしょ。ないものはないんだから。

ねえ、見て。こんなことも出来るようになった。おいら、こんなことも出来るようになったんだよ。君は？何かできるようになった？

【なんにも】
そう。

【でもいいの】

そう。結構経ったよ。なんか、今日は長いような気がするんだけど、いいのかなあ。

ねえ……もう戻らない？ そろそろヤバいんじゃないかな。

【何が？】

何がって……だって、おいら、もうこんなに動けるんだよ？ 君は、何も出来なくなってるんでしょ？ よくないよ。

【なんで、君がそういうこと言うの？ いいとかよくないとか。何で君がそういうこというの？】

今はおいらが人間だよ。

今は君がぬいぐるみなんだよ。ねえ、もういいんじゃない？

【なによ】

もう終わろうよ。きみにぬいぐるみは向かないよ。

【うるさいな】

例えば、あのむかつくおっさんだって、優しく笑う瞬間があるだろうし、うるさいおばさんにも誰かにときめいた青春時代があって、偉そうな馬鹿も追いかけた夢があって、生気なガキも生まれた時は何の疑いもなく泣いたんだよ。そういうこと、君、考えるでしょ？ おいら、考えないもん。

【今考えてるじゃない】

だからこれは、君の真似だよ。おいら、君かテレビの真似しか出来ないもん。

【バカみたい】

ばかだよ。脳みそないもの。ゴキブリより脳みそないもの。今はあるけど。

【アタシの気持ちなんて、分かんないでしょうね】

分かんないよ。君のいうこと、時々わけわかんないよ。

【そう】

そうだよ。ねえ、もういいんじゃない？ もう戻ろうよ。おいら、疲れたよ。だって、手足は長いしバランスはとりにくいし、心臓は動くし、気を抜いたら目は閉じちゃうし。ずっと脳みそが動いてるんだもん。疲れたよ。

【うん】

うん……。

【ねえ、抱きしめてよ】

「私」、ぬいぐるみを抱きしめる。

君はだから……にんげんとして、抱きしめられたいんじゃないの？ おいらはほら……

ぬいぐるみだから。

【だからなによ】

ぬいぐるみとして、抱きしめられているんだよ。違いってあるでしょ？ ぬいぐるみは抱

きしめ返すことなんてできないし。

君は抱き締めたんじゃないの？ そういう……そういうことだよ。

【そういうことか】

そういうことだよ……

「私」、ぬいぐるみを置く。

じゃあ、おいら寝るね。

「私」、電気をつける。ぬいぐるみと中身が入れ替わる。

待つてよ。まだアタシ、眠くないし。ずっと思ってたけど、君、朝起きてとか言ってるけど、寝る必要ないよね？ だって、ぬいぐるみでしょ？ 何そんな、いきものみたいなコト言ってるの？

今はアタシが人間だよ。今は君がぬいぐるみなんだよ。ねえ、もういいんじゃない？ もう戻ろうよ。アタシ、人間向いてないよ。だって、なんかすごく、疲れるんだもん。楽しいことも、なんか悲しいんだもん。テレビで言ってたよ。向いてないと思ったら仕事変えてもいいんだよね？ アタシ、転職したいなあ。転職っていうか、復職。そっちのほうが、絶対向いてるもの。

「私」、電気を消す。ぬいぐるみと中身が入れ替わる。

知らないよ。そもそも、君が始めたことでしょ？おいらは別にぬいぐるみそのままでもよかったんだ。それを君が、どうしてもっていうから付き合ってるんじゃないか！

もういいでしょ？ 明日の予定は？ おいらはないけど。

……だからそれは嘘だし、君かテレビの真似しかできないんだってば。君にはうさちゃんとかハチとトラオがいたかもしれないけど、おいらにはそんな夢の国にいなさな知り合い、いないよ。

「私」、電気をつける。ぬいぐるみと中身が入れ替わる。

言っておくけど、アタシは別にぬいぐるみそのままでもよかったんだからね。そりゃあ、最初は、はしゃいじやったかもしれないけど、二十年過ぎたころから、もういい加減って思ってたよ。そもそも、君が……うるさいな、そうだけど、でも、もう、疲れちゃったんだもの。ねえ、謝るから、戻ろうよ。

「私」、電気を消す。ぬいぐるみと中身が入れ替わる。

くだらないよ。君の言ってることは全部くだらないよ。でも、そっちの方が向いてるよ。だって、君、考えちゃうでしょ。みんなと一緒にがいいと思うのと、みんなと違うのがいいと思うの、どっちが普通かとか、考えたちゃうでしょ。おいら、考えないもん、そんな、夢みたいなの、くだらないこと。でも、そっちの方が向いてるよ。

分かった。じゃあ、もし君が、明日か、来月か、何十年後かに、死んだら、交代するっていうのはどう？ 次は、おいらがやるよ。それでいいでしょ？だから、もう、夢の中で夢を描くの、やめようよ。ねえ、抱きしめてよ。

「私」、電気をつける。ぬいぐるみと中身が入れ替わる。

「私」、ぬいぐるみを抱きしめる。

ありがとう。わかった。そうしよう。そうすることにしよう。これで終わり。明日からは元通り。むなしくないよ。先に考えていたから、ね。今までありがとう。じゃあ、アタシ寝るね。君は？明日の予定は？

「私」、電気を消す。暗転

おわり

UNADUKIcolony 企画「朗独劇」

2019年 3月2日(土) / 3日(日)

山口市 クリエイティブ・スペース赤れんが ホール I

「仮題」

脚本：中野志保

装丁：中野志保

発行：ユニット・ピコ

MAIL unitpico@gmail.com

※ 上演希望の際は、必ずユニット・ピコまでお問い合わせください。